

# 図画工作科の基礎的な能力を高める指導法の研究

— 表現・鑑賞における言語活動を通して —

大 日 孝 浩<sup>1</sup>

図画工作科の目標に造形的な創造活動の基礎的な能力である発想や構想の能力、創造的な技能、鑑賞の能力を培うことが示されている。本研究では、この目標を達成させるための手立てとして、表現及び鑑賞活動の中に話す、聞く、書くなどの多様な言語活動を取り入れた授業を行い、児童の作品や活動の様子などを分析した。その結果、基礎的な能力の高まりが見られた。

## はじめに

小学校学習指導要領解説図画工作編（以下、新学習指導要領解説）では「思考・判断し、表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること」（文部科学省 2008 p. 3）が示されている。また「B鑑賞」の各学年の内容に、話したり、聞いたりするなどの言語活動の充実が位置付けられている。一方、学校や美術館では「対話を通して個々の見方や価値意識を深めたり広げたりする」（上野 2008）などの対話による鑑賞教育が行われている。

本研究は、これまでの鑑賞活動だけでなく、「A表現」(2)の造形活動の中にも、話す、聞く、書くなどの多様な言語活動を取り入れることにより、図画工作科の基礎的な能力の高まりを目指した。

## 研究の内容

### 1 テーマについて

#### (1) テーマの意味

「図画工作科の基礎的な能力」とは、新学習指導要領解説で、自分の思いを形や色などで表したり、よさや美しさを感じ取ったりするなどの造形的な創造活動を実現するために必要な能力とされている。具体的には、発想や構想、創造的な技能、鑑賞などの能力である。

また、これらの三つの能力について「発想や構想の能力は、形や色、イメージなどを基に想像をふくらませたり、表したいことを考えたり、計画を立てたりするなどの能力である。創造的な技能は、材料や用具を用いたり、表現方法をつくりだしたりするなど、自分の思いを具体的に表現する能力である。鑑賞の能力は、作品をつくったり見たりするときに働いているよさや美しさなどを感じ取る能力である」（文部科学省 2008 p. 8）と定義している。

1 山北町立三保小学校

研究分野（言語活動の充実 図画工作）

本研究では、言語活動を通して、これらの能力を相互に関連させながら、造形的な創造活動の基礎的な能力の育成を図ることをねらいとした。

#### (2) テーマ設定の理由

筆者のこれまでの授業実践の中で、児童は楽しみながら造形活動に取り組んでいた。しかし、児童が自分の表したい形や色のイメージを広げたり、表現方法を工夫したりするための具体的な手立てが曖昧だったと感じる。

「つくる力や鑑賞する力は、言語活動とともに深まります。鑑賞力とつくる力と言葉の表現力の3つの要素はすべてが絡み合っているのです」（稲庭 2010）とあるように、基礎的な能力は言語活動とともに高められることを述べている。

そこで、つくりながら思ったことや感じたことを言葉に置き換えて表現したり、伝え合ったりすることで、さらに形や色のイメージを広げたり、材料や用具などを工夫しながら表現方法をつくりだしたりすることができる考えた。

### 2 研究仮説

以上を踏まえ、研究仮説を次のように設定した。

表現及び鑑賞の活動で、多様な言語活動の設定と取り入れ方の工夫を行えば、図画工作科の基礎的な能力を高められるであろう。

### 3 研究構想

#### (1) 多様な言語活動の設定と取り入れ方の工夫

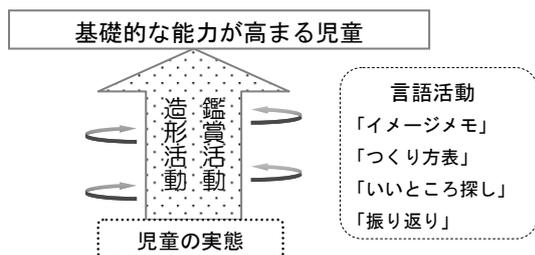
言語には自分の考えを整理したり、他者と伝え合ったりできるよさがある。基礎的な能力を高めるために、自分のイメージや表現方法を言語化すること、作品のよさを伝え合うことなどの要素を表現及び鑑賞の活動に取り入れることが必要である。

そのための具体的な手立てとして、「イメージメモ」「つくり方表」「いいところ探し」「振り返り」の四つの言語活動を設定した。それぞれの言語活動のねらいや内容を明確にし、効果的な場面で取り入れる工夫をした(第1表)。

第1表 言語活動のねらいと内容

言語活動	ねらい	内容
「イメージメモ」	自分のイメージを広げ整理する。	メモを書きながら題名を考え、発表する。
「つくり方表」	多様な表現方法をつくりだす。	表現方法を言語化し、発表する。
「いいところ探し」	友達や自分の作品のいいところに気付く。	感じたことを友達と伝え合う。
「振り返り」	自分の活動を振り返り、感想をもつ。	カードに振り返りを書き、発表する。

研究構想では、造形活動と鑑賞活動の一つの軸とし、これらの活動と言語活動を相互に関連させながら、基礎的な能力が高まる児童を目指している(第1図)。児童の活動によって表現される言語に着目し、効果的な造形活動や鑑賞活動を行う。



第1図 研究構想図

(2) 予想される児童の姿

本研究では「A表現」(2)の表したいことを立体に表す活動を行う。材料は可塑性のある粘土を用いる。第2表は言語活動を通して、予想される児童の姿を表にしたものである。これらの内容に基づき基礎的な能力の高まりを検証する。

第2表 予想される児童の姿

観点	項目	内容	キーワード
発想や構想の能力	a	具体的な言葉で思い付いた形を表している。	具体性
	b	イメージを関連させながら想像している。	関連性
	c	作品に物語性を加えてイメージを広げている。	物語性
創造的な技能	a	「つくり方表」を基に、多様な形や質感を表現している。	多様な形や質感
	b	形の方向感をとらえている。	方向感
	c	外側や内側の空間を表現している。	空間
鑑賞の能力	a	「つくり方表」を基に表現方法を言葉で表し、形の特徴をとらえている。	形の特徴
	b	具体的なイメージをいろいろな見方から表現している。	具体的なイメージ
	c	友達の見方・感じ方の違いに気付いたり、共感したりする。	気付きや共感

4 検証授業

(1) 検証授業の概要

実施期間 平成22年9月～10月

対象児童 山北町立三保小学校第5学年 計7名

題材名 「海の底の不思議な岩」A表現(2) B鑑賞(1)

授業時数 計8時間

題材の目標

粘土で思い付いた形をつくりだすことに関心を持ち、自分のイメージをふくらませながら表したいことを見付け、材料や用具の特徴を生かしながら創意工夫して

表現するとともに、自他の作品のよさや美しさを感じ取り味わう。

(2) 児童の実態

児童は男子2名、女子5名、計7名(以下、7名の児童をC1～C7とする)の少人数学級である。クラスのよいところは、友人関係が親密で、相手の意見や長所を素直に受け入れようとするところである。課題は、友人関係が限定され、多様な考えに触れにくいことであり、意見交換を活発にする中で、意見の幅を広げ、自らの考えを深める必要がある。

(3) 指導計画

本題材は全8時間とし、1作目で、にんじんが変身した「じんじん君」、2作目では「海の底の不思議な岩」を自由に想像してつくる(第3表)。言語活動の「イメージメモ」「つくり方表」「いいところ探し」は各活動中に取り入れ、「振り返り」は各活動後に自分や友達の活動を振り返り感想を書く。

第3表 指導計画(全8時間)

時	学習内容	言語活動
1, 2, 3	にんじんの形から「じんじん君」をつくる活動を通して、粘土に慣れる。	「イメージメモ」「いいところ探し」「振り返り」
4, 5, 6, 7	「海の底の不思議な岩」を自由に想像し、表現する。	「イメージメモ」「つくり方表」「いいところ探し」「振り返り」
8	自分や友達の作品のよさを味わい鑑賞する。	「いいところ探し」「振り返り」

(4) 言語活動と児童の様子

ア 「イメージメモ」

「イメージメモ」は作品をつくる前にアイディアスケッチなどのかかせるのではなく、つくりながら見えた形や思い付いたことを言葉で書かせた。「イメージメモ」の書き込みを2回に分け、作品のイメージの変化が分かるようにし、作品完成後にメモの言葉を基に題名を考えさせた。

児童には、つくりたいものを始めから決めずに、いろいろな形を思い浮かべながらつくらせるようにした。自由に思い付いた所を歩いて行く散歩のように、イメージを「さんぽ」させながら、つくりたいものを見付け、作品に表せるように指導した。

C3の2作目では、つくり始め、人間が通れるような「迷ろ」のイメージをもっていた(第2図)。「イメージメモ」前半で「迷ろ」と書いたが、つくる途中に変化し、その「迷ろ」に×印を付けた。「イメージメモ」後半では、「魚の遊園地」や「海の底の魚があつまる岩」など、そこに魚たちが集まる遊び場へと変化した。題名は「海の底の遊園地」となり、岩の上でたくさんのたこが遊んでいた、魚が輪の中をくぐったりしている様子を表した。

このように、C3は「イメージメモ」によって、浮かんできた言葉を整理し、手を休めず夢中になってつくり続けることができた。



「イメージメモ」前半  
 迷る(×)  
 めずらしい岩  
 たからがあるいわ  
 もじがある岩



「イメージメモ」後半  
 魚の遊園地  
 海の底の魚があつまる岩  
 題名「海の底の遊園地」

第2図 C3の作品と「イメージメモ」の変化(2作目)

C4の場合は、つくりながら「何も形が見えてこない」と話していたが、粘土のかたまりから足の部分をひねり出したり、胴部に穴を開けたりして形をつくった(第3図)。

「イメージメモ」前半で、友達のアドバイスから「うちまたぞう」「うし」「さい」など、角のある動物の形をとらえ始めた。「イメージメモ」後半では、「ここに魚が通るような感じ」とつぶやきながら「魚のひみつきち」や「魚のとおり道」など、海に関係するものにイメージが広がった。作品は角のある動物から海の底の岩のイメージへとつながった。C4の「振り返り」の中で、形を変化させながら、「イメージのさんぽができた」ことなど、自分のイメージの広がりを振り返っている。

このように、C4は「イメージメモ」を書く時に、友達のアドバイスを取り入れたことによって、次第に自分の言葉でイメージをふくらませ、表したいものを作品に表せるようになった。



「イメージメモ」前半  
 ・うちまたぞう } つのが  
 ・うし } いっぱい  
 ・さい }  
 ・にわとり  
 ・よこ長はにわ ・Sがある



「イメージメモ」後半  
 ・魚のひみつきち  
 ・魚のとおり道(トンネル)  
 ・足が2本でたおれそうだったのであていさせました。  
 ・穴がいっぱいです。  
 題名「海のそこのトンネル」

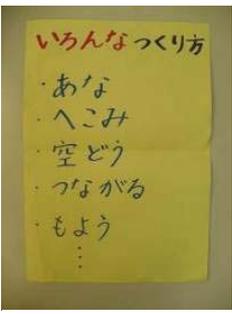
第3図 C4の作品と「イメージメモ」の変化(2作目)

C4の「振り返り」(7/8時間目 一部抜粋)

作品は、どんどん形がかわってってイメージのさんぽができたかなと思いました。(中略) イメージメモを見ると一日目よりくわしく、たくさん書けているのでよかったです。

イ 「つくり方表」

児童には1作目の始めに「かき出し」「ひねり出し」「ひもづくり」などの表現方法を紹介した。その後、児童は「あな」「へこみ」など、自分の表したいことを基に様々な表現方法でつくり始めた。それらを児童が言語化したものが「つくり方表」である(第4図)。さらに、2作目で、この「つくり方表」を基に、表現方法を組み合わせたり、新しい表現方法をつくりだしたりした。



第4図 「つくり方表」

C2の2作目では「あな」やねじった「ひも」などの表現方法が見られた(第5図)。開けた穴を作品の内側で全部つなげたり、ねじったひもを付けたりして工夫した。また、C2の「振り返り」で、作品に穴を開けたことによって、「風通しがいいかんじで気持ちよくなりました」と、形の特徴をとらえながら、自分の表したいものに合った表現方法を表そうとしている。

このように、C2は「つくり方表」を基にして、工夫しながら様々な表現方法を組み合わせることができた。



第5図 C2が作品をつくる様子(2作目)

C2の「振り返り」(7/8時間目 一部抜粋)

最初の方は、すごくあつかったです。だから、穴を広くつくりました。それがねん土がいっぱいあるところはどんどんけずっていきました。そうしたら、風通しがいいかんじで気持ちよくなりました。

C7の場合は、「何か貝のくずれたものをくっ付けているみたい」とつぶやきながら、粘土の固さの違いを生かして、化石のようなものを表現しようとした(第6図)。C7は本物の貝に触れることで、様々なアイデアが浮かんできたようである。C7の「振り返り」から、作品のすわる部分とまわりの部分の質感の違いをとらえて表現していることが分かる。

このように、C7は具体物を見たり触ったりしながら、言葉でイメージをふくらませ、新たな表現方法をつくりだすことができた。



第6図 C7が作品をつくる様子(2作目)

### C7の「振り返り」(7/8時間目 一部抜粋)

貝のギザギザをまねすれば、かせきみたいになると思  
い、ねん土のかわいたのをつけたら、すわる部分とまわり  
のかんじがちがってきて、いい作品ができた気がします。

### ウ 「いいところ探し」

「いいところ探し」は友達の仕事のいいところを付  
せん紙に書かせ、友達同士で伝え合い、作品のよさを  
感じ取らせることをねらいとした。

C1がC2に書いた「いいところ探し」では、穴がつか  
がっていることやひもがねじってあることなど、「つ  
くり方表」を基にして、友達の表現方法を言葉で表し  
ながら、形の特徴をとらえていた。また、C1の「振り  
返り」で、友達から「階段みたいなもようがおもしろ  
い」など、作品のよさを伝えられたことで、さらに「も  
っと何かできる」とつくる意欲を高めている。

このように、C1は作品のよさを伝え合うことを通し  
て、次の課題の関心や意欲へとつなげることができた。

### C1がC2に書いた「いいところ探し」(8/8時間目)

C2 ちゃんへ 穴があいているのを見ると全部つなが  
っているのがすごいし、おもしろいと思います。ねじって  
あるのがささっていておもしろいです。もようが、かく  
かくしていて、せんすいかんのマークみたいだと思いま  
した。C1より

### C1の「振り返り」(7/8時間目 一部抜粋)

みんながくれたメッセージでおもしろいといってく  
れました。でも、もっと何かできる気がします。次やる  
時は、かたまらないで大きく作ってみたいと思います。

C5 の場合は、2作目の始め、「ピザを取ろうとする  
左手」をイメージしながら作品をつくった(第7図)。  
C5がC2からもらった「いいところ探し」で、「手なの  
に穴があいている」ところが面白いことなど、作品の  
よさを伝えられた。「振り返り」の中で、手がつなが  
っているのは、「みんなにいわれておもしろいと思いま  
した」など、作品の見方の変化を書いている。

このように、C5は「いいところ探し」で、友達の見  
方に触れながら、自分の作品を見つめ直し、作品のよ  
さに気付くことができた。



第7図 C5の作品(2作目)

### C5がC2からもらった「いいところ探し」(8/8時間目)

C5へ 手なのに穴があいているってところも面白いと  
思います。手がつながれてるところもいいと思います。  
C2より (一部抜粋)

## 5 基礎的な能力の変容

ここでは7名の児童のうち、特に、基礎的な能力の  
変容が見られたC6に着目し、1作目「じんじん君」と  
2作目「海の底の不思議な岩」の活動を比較した。

### (1)発想や構想の能力を高める活動

1作目の始めは、つくっては形を変えることを何度  
か繰り返していた(第8図)。「イメージメモ」前半で「①  
あお虫」「②ペンギン」「③ぞう」など、順番に様々な  
形へと変化したが、前の形から次の形へとイメージを  
つなげているのではなく、形を変えるたびに始めから  
やり直してつくっていた。

つくる途中で、友達から「いすに見える」などのア  
ドバイスをもらい、「イメージメモ」に「⑤いす」と書  
いたが、そこからイメージが広がる様子は見られなかつ  
た。「振り返り」の中で、「最初は、くまになったり、  
ぞうになったりして、考えが固まらなかった」と書い  
ている。その後、「⑥あひる」とあるように、形を変え  
ながらつくりたいものが決まっていた。

「イメージメモ」後半では「⑥あひる」の形を基に  
して角を立てたり、「あひる」の背中に穴を開け「くま  
を乗せたりして工夫した。題名は「不思議なあひる」  
となった。



### 「イメージメモ」前半

- ①あお虫
- ②ペンギン
- ③ぞう
- ④くま
- ⑤いす
- ⑥あひる



### 「イメージメモ」後半

- 乗れるあひる
  - くまが乗ってるあひる
  - つが出てあひるみたいな物
- 題名「不思議なあひる」

### 第8図 C6の作品と「イメージメモ」の変化(1作目)

2作目では、イメージの広がり方が変化し始めた。  
「イメージメモ」前半で、「ぼこぼこしている岩」か  
ら「ナルトみたいな岩」など、始めからつくりたい形  
を固めてしまうのではなく、柔軟にイメージを変化さ  
せた(第9図)。また、「ナルトみたいな岩」に「上か  
らみると」の言葉を加え、作品を違った角度から見る  
ことにより、イメージに具体性をもたせていった。

「イメージメモ」後半では、C6の「振り返り①」に  
あるように、「カリフラワー」の形を横に倒して、「サ  
ザエ」の形に変化させ、その中に海へびが住めるよ  
うな空間をつくった。このことから、1作目と比べて、  
イメージを関連させながら想像していることが分かる。  
また、題名に「サザエ岩の海へびたち」とあるように、  
岩の中に海へびの母親と子どもたちが住んでいるとい  
う物語性を加えてさらにイメージを広げている。「振

り返り①」で「じんにん君よりかも、たくさん想ぞうできた」とあるように、イメージの広がりをも1作目と比較して書いている。

このように、C6は「イメージメモ」によって、作品をつくりながら表現したいものを言葉で整理し、自分のイメージに具体性や関連性、物語性などを加えて広げていくことができた。



「イメージメモ」前半  
ぼこぼこしている岩  
上からみると、ナルトみたいな岩  
パフェみたいな岩  
カリフラワー



「イメージメモ」後半  
海へびが住める所  
たくさんの海へびが住める岩  
題名「サザエ岩の海へびたち」

第9図 C6の作品と「イメージメモ」の変化(2作目)

C6の「振り返り①」(一部抜粋)

(5/8時間目) さいしょは、たてにしていたら、カリフラワーみたいでした。よこにしたらおもしろいかなと思って、よこにしてみたら、サザエみたいになりました。(中略)あなやいろいろなもようをつけて、だんだんおもしろくなってきました。

(7/8時間目) この前の、じんにん君よりかも、たくさん想ぞうできたのでよかったです。

(2) 創造的な技能を高める活動

2作目で「つくり方表」を取り入れたことによって、「ひも」「うずまき」など、表したいことに合わせて表現方法を工夫していった(第10図)。また、1作目の「あな」は、あひるの背中を半立体的にくり抜いたものであったのが、2作目は粘土のかたまりの中に「あな(ほら穴)」を開け、海へびたちが住めるように空洞をつくり、内側の空間をとらえることができた。



「あな」「もよう」(1作目)



「あな(ほら穴)」「もよう」「ひも」「うずまき」(2作目)

第10図 1作目と2作目のつくり方の比較

また、C6の「振り返り②」で、作品の表面はサザエのようなぶつぶつ感を表現し、内側の部分はへらでならしながら、つるつるさせようとしたことが分かる。これは、新しい表現方法をつくりだす時に、言葉だけ

でなく実物のサザエなどに触れた時の感覚や体験を基にして表現を工夫したことを示している。

このように、C6は形の特徴をとらえながら、部分的な質感の違いを表現することができた。

C6の「振り返り②」(7/8時間目 一部抜粋)

サザエの所など、ぶつぶつがたくさんあって、つるつるな所はぜんぜんありません。だから、そのほらあなをつるつるさせました。

(3) 鑑賞の能力を高める活動

C6がC7に書いた「いいところ探し」では、1作目に「ふくろうみたい」など、見て感じたことを表現しているが、どんなところがふくろうみたいなのか、他の部分はどうか感じたのかなど、いろいろな見方から具体的なイメージを書いていない。

2作目になると、前から見た印象と後ろから見た印象を分けて表現し、さらに「王様がすわるような」「ごうかな」など、「いす」や「かせき」を形容する言葉が増えた。また、「私だったら、ねんどの固いのをかせきにしようと思いつかない」と友達の表現方法の工夫に気付いている。

このように、C6は様々な角度から作品を味わってイメージを広げたり、友達の表現方法の工夫を言語化し、伝えたりすることができた。

C6がC7に書いた「いいところ探し」

(1作目) C7ちゃんの作品は、ふくろうみたいなのが、とてもおもしろいと思いました。C6より

(2作目) 前から見ると、王様がすわるような、ごうかないすにみえます。後ろから見ると、たくさんのかせきの集まりみたいです。私だったら、ねんどの固いのをかせきにしようと思いつかないと思うので、とてもすごいです! C6より

6 成果と課題

(1) 発想や構想の能力

第2表で示した「予想される児童の姿」の項目a～cにおいて、ほぼ全体的に発想や構想の能力の高まりが見られた。

項目aの「具体性」においては、「イメージメモ」によって、一つの単語であったイメージに、形容する言葉が増え、具体性をもたせていくことができた。特に、メモを書く時「何に見える?」など、作品のイメージを伝え合うことは、発想や構想の能力を高める上で非常に有効であった。「何も見えない」とつぶやいていた児童も、友達同士の自然な声掛けが起きたことにより、さらに柔軟にイメージを広げることができた。

項目b、cについても、「イメージメモ」だけでなく、授業中の児童のつぶやきや何気ない会話によって、作品のイメージに「関連性」や「物語性」などを加えていくことができた。これは、少人数の活動の中で、児

童は友達の活動の様子をよく把握することができ、互いに関心をもちながらつくることができたことが影響したと考えられる。

課題は、自分の「イメージメモ」に友達がイメージした言葉だけを取り入れてしまうことである。そこで、児童が自分の作品と対話しながら、友達のイメージを加えたり、つなげたりすることが必要である。

また、動物や乗り物など、形を表す言葉が多かったが、「柔らかそうな」「重そうな」などの感覚的な言葉や「うれしそうな」「さみしそうな」などの心情的な言葉など、自分の感覚や体験を基にした言葉を加えていけば、さらにイメージを深められると考える。

このように、「イメージメモ」を活動の手立てとして役立たせるためには、書く目的や内容を明確にし、造形活動と相互に関連させていくことが大切である。

## (2) 創造的な技能

予想される児童の姿の項目 a～c において、項目 a、c に高まりが見られた。特に創造的な技能の高まりがあったのは、項目 a の「多様な形や質感」である。児童は、ひもをつなげて空間を表したり、固まった粘土のかけらをさしこんで、質感の違いを表現したりした。また、それらの表現方法は、「魚が通るようなトンネル」、「海の王がすわるようないす」など、児童が表したいことに合わせて作りだすことができた。このことは、発想や構想の能力と創造的な技能が相互に関連しながら高まったことを示している。

多様な表現方法が見られた理由として、「つくり方表」を基に「もっと他の方法はないか」と新しい表現方法をつくりだそうとする意欲につながったことが考えられる。また、1 作目で習得した表現方法を共通言語として児童が認識できるようになると、2 作目の作品で活用していくことができた。2 作目では全ての児童が 1 作目より様々な表現方法をつくりだしていった。

課題は、項目 b の「形の方向感」などをとらえている児童が少なかったことである。「つくり方表」はつくり方の数や種類を整理するものであって、そのつくり方の意味やよさを考えるものではない。そこで、自分のつくりたいものとつくり方を一致させていくことを考えさせることが求められる。このことは、児童の表したいことを基にしながら、創造的な技能を高めていく段階的な指導が必要であることを示している。

## (3) 鑑賞の能力

予想される児童の姿の項目 a～c において、ほぼ全体的に鑑賞の能力の高まりが見られた。特に有効であったのは、項目 a の「形の特徴」である。児童は作品を鑑賞する時に「空どう」や「あな」など、形の特徴を作品のイメージとともにとらえることができるようになった。項目 b の「具体的なイメージ」は、前や後ろなど様々な角度から印象を伝えようしたり、造形活動の時にいろいろな角度から自分のイメージを広げ

ようしたりする態度につながった。

このように、友達の作品から感じたことを伝え合う「いいところ探し」の活動は、イメージや表現方法の広がりに関連しながら高まったといえる。また、鑑賞の能力が高まることで、伝える内容が増え、「友達から認めてもらえている」という児童の自信につながることもできた。

課題は、「イメージメモ」と合わせて鑑賞したり、つくる過程でのイメージや表現方法の変化をとらえたりする児童が少なかったことである。そこで、作品鑑賞をその時の印象だけでなく、作品の変化や活動の様子も含めて児童にとらえさせていくことが必要である。鑑賞の能力を高めるために、つくる過程や活動の様子などにも目を向けさせ、よさや美しさを感じ取らせることも大切である。

## 7 まとめ

本研究では、多様な言語活動の設定と取り入れ方の工夫をすることによって、発想や構想の能力、創造的な技能、鑑賞の能力などの基礎的な能力の高まりが見られた。また、これらの三つの能力は独立しているのではなく、相互に関連しながら一体的に高まることも明らかになった。

図画工作科で言語活動を充実させていくためには、活動の設定や取り入れ方など、方法だけを形式的に行うのではなく、その目的や活動内容、児童の実態、題材の特性などを考慮していくことが大切である。そのことにより、教科のねらいに基づいた効果的な指導を行うことができる。

## おわりに

本研究において、児童 7 名の一人ひとりの質的な変容を分析し、その事例から見えてくるものを検証した。その結果、自分の表したいものを表現し、それが友達の共感や理解につながる時、児童は達成感を味わい、自信をもつことができた。これからも、児童の豊かな感性を大切にしながら指導していきたい。

## 引用文献

- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領解説 図画工作編』 日本文教出版
- 稲庭彩和子 2010 『造形ジャーナル vol. 55-3』 開隆堂出版 p. 9
- 上野行一 2008 『対話による鑑賞教育 図工・美術教師のための実践ガイドブック』 光村図書出版 p. 3

## 参考文献

- 奥村高明 2010 『子どもの絵の見方 子どもの世界を鑑賞するまなざし』 東洋館出版社